

St. Luke's International University Repository

聖路加ヘルスヒューマニティーズ創設への教育プロジェクト: 2022（令和4年）年度聖路加国際大学教育改革推進 事業報告

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-03-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井上, 麻未, 木下, 康仁, ジェフリー ハフマン, 糟谷, 知香江, 射場, 典子, 歌川, 光一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.34414/0002000175

実践報告

聖路加ヘルスヒューマニティーズ創設への教育プロジェクト —2022（令和4年）年度 聖路加国際大学教育改革推進事業報告—

井上 麻未 木下 康仁 ジェフリー ハフマン
糟谷 知香江 射場 典子 歌川 光一

An Educational Project to Establish Health Humanities at St. Luke's International University: Report on the AY2022 Educational Innovation Promotion Project

Mami INOUE Yasuhito KINOSHITA Jeffrey HUFFMAN
Chikae KASUYA Noriko IBA Koichi UTAGAWA

[Abstract]

The first Health Humanities programme in Japan was set up at St. Luke's International University, and a total of seven lecture events were planned and implemented to achieve the following objectives: 1) to share basic knowledge and common understanding of health humanities across all disciplines by organising educational programmes for university faculty and hospital employees, 2) to develop teaching materials for new courses, and 3) to publicise St. Luke's unique health humanities initiatives to the wider society. A total of 356 participants from multiple disciplines and professions attended the lectures. A questionnaire was administered after each lecture. The questionnaires revealed that the lectures were generally well received and led to the discovery of new perspectives and the promotion of interdisciplinary exchange. The project was particularly significant in that it was an organisation-wide initiative. In addition, a book on health humanities research will be published in the near future, based on these results. The possibilities offered by cross-disciplinary and global collaboration with external lecturers were revealed, and a network was established for the future. From the above, it can be said that the objectives of the project were achieved to a great extent. The results of the project are already being reflected in the development and implementation of new health humanities courses in the university's Graduate School of Nursing Science.

[Key words] Medical and health humanities, Music therapy, Arts in health, Studies of culture and representation

[要 旨]

聖路加版ヘルスヒューマニティーズ創設のため以下の目的を設定し、全7回の講座を企画実施した。
1) 大学教職員と病院職員を対象とする学習・検討会の開催により領域を超えて全体でヘルスヒューマニティーズ（以下、HH）についての基礎知識を共有し共通理解を図ること、2) 新規科目開講に向けた教材開発、3) 聖路加独自のHHの取組を社会的に周知してゆくこと。本講座には多領域・多職種から計356人の参加があった。毎回の講座では終了後にアンケートを実施した。アンケートから本講座は概ね好評で、新たな視点の発見や学際的な交流促進につながったことが明らかになった。特に組織全体で取組めた点に本事業の意義があったと考える。今後はこの成果も踏まえ、HH研究の書籍が刊行される予定である。外部講師らとは領域横断的かつグローバルな協働の可能性を得たため、今後につながるネットワーク

クを構築することができた。以上の事から、本事業の目的は大いに達成することができたと言える。
本学大学院のHH新規科目の展開においても本事業の成果を反映させていきたい。

【キーワード】ヘルスヒューマニティーズ, メディカルヒューマニティーズ, 音楽療法, アーツ・イン・ヘルス, 表象文化論

I. はじめに

聖路加国際大学大学院看護学研究科では2023年度より「ヘルスヒューマニティーズ概論Ⅰ, Ⅱ」および「健康と病いの語り概論」の新規3科目を開講した。社会的運動性を特徴とするヘルスヒューマニティーズ（以下, HH）は、保健・医療と芸術・人文学・社会科学を融合する新分野であり、欧米で急速に研究教育が進んでいる。そこで、本邦初となる聖路加版HHを創設し本学の教育改革を推進するために、以下の目的・目標を設定し本事業を遂行した。1）大学教職員と病院職員を対象とする学習・検討会の開催により領域を超えて全体でHHについての基礎知識を共有し共通理解を図ること、2）新規科目開講に向けた教材開発、3）聖路加独自のHHの取組を社会的に周知していくこと。

これらの目的・目標のもと、2022年8月から2023年3月まで2回の学習・検討会、1回の公開講演会、4回のリレー講座、全7回の企画を計画・実施した。総申込者数は計487名、総参加者数は計356名であった。参加者の内訳としては、大学院生が最も多く3割、次いで、本学教員が2割、看護師と学部生が1割であった。その他、病院関係者や出版社勤務、介護支援専門員、会社経営者、新老人の会や各種家族会、高校生、他大学の教員・学生など、幅広い職種や分野からの参加があった。

II. 各回の概要

各回の概要は次の通りである。第1回ヘルスヒューマニティーズ学習・検討会「ヘルスヒューマニティーズの概要」（8月5日）では本学の井上麻未、ジェフリー・ハフマンが講師を務め、ヘルスヒューマニティーズ（HH）の概要や関連論文について紹介した。我が国において、今までHHと認識されずに進められてきた研究、教育、実践をHHとして位置づけることで、人々の健康やウェルビーイングを高め、メンタルヘルスや社会的つながりを保ちながら健康寿命を伸ばす可能性を明らかにした。米国では現在、医療系に限定しない学部教育でHH・メディカルヒューマニティーズ（MH）教育が急速に拡大しており、職種の垣根なくHHを学ぶメリットについて情報共有を行った。

第2回HHリレー講座「ヘルスヒューマニティーズ領

域における視覚的イメージの実践可能性」（9月21日）では、林容子氏（一般社団法人アーツアライブ 代表理事）が「対話を通じた絵画鑑賞（アートリップ）とフォトストーリー」、本学の糟谷知香江教授が「視覚的イメージの実践可能性」と題して講演を行った。林氏のテーマはアートリップ（絵画鑑賞を通して対話を促すプログラム）とフォトストーリー（写真をみて物語を創作するプログラム）であった。糟谷教授は心的外傷に対する心理学的アプローチとして、視覚的イメージを用いて語りを引き出すアプローチがあることを示し、視覚的イメージを介した実践の可能性を明らかにした。

第3回HH公開講演会「自閉症者と文学・芸術をめぐる諸問題——表象文化論の視点から」（10月24日）では田中純氏（東京大学大学院総合文化研究科教授・表象文化論）が自閉症と芸術（論）が交差するケース・スタディと今後の展望を主題として講演。自閉症者の経験を通して、neurotypical（神経学的定型発達者）が気付きにくい世界の感じ方や人間存在の在り方を探究する研究についての講演、芸術作品が自閉症者と非自閉症者を言葉に依らずして直接つなぐツールになる可能性への示唆など受講者が新たな知見を得る機会となった。

第4回HHリレー講座「音楽療法を医療現場に生かす：認知症と失語症を中心に」（11月18日）では佐藤正之氏（東京都立産業技術大学院大学特任認知症・神経心理学講座教授）が認知症と失語症の方を対象にした音楽療法のエビデンスについて紹介した。音楽が社会から療法として認められるには、エビデンス、患者・家族の理解、現場の理解、経済性の4つが揃う必要があること、認知症に対する音楽療法は複合的なセラピーになる可能性がありBPSDに対する有効性も確立されていることを述べられた。一方で今後研究が必要とされる課題についても明示され、受講者の音楽療法への理解が深まる講演であった。

第5回HHリレー講座「（聖路加国際病院における音楽療法）」（12月23日）では伊藤マミ氏（聖路加国際病院 音楽療法士）が、患者、家族、病棟スタッフを対象とし、緩和ケア科と小児科を中心に2名の音楽療法士が活動する本院での音楽療法を紹介した。音楽療法士が音楽の要素や影響を熟知し心理学や医学の基礎知識を持った上で、関係性を通して行う音楽療法は、ニーズを満たすケアの要素もあるが傷つきと向き合うセラピーとしての要

素もあること、チームの一員として連携して介入されているということなど、実際の音楽療法の実践を知ることができる大変貴重な機会であった。なお、特別企画として、聖路加聖歌隊によるクリスマス聖歌の合唱（動画）と伊藤マミ氏と聖路加聖歌隊のオンライン対談を行った。テーマは「自分にとって音楽とは」等であり、ライブでの有意義な対談となった。会の締めくくりとして上田憲明チャプレンからもお話をいただいた。

第6回HHヘルスヒューマニティーズ学習・検討会（2）「ヘルスヒューマニティーズと教育文化」（1月25日）では本学の歌川光一准教授が講師を務めた。第1部：近現代日本の self-cultivationにおいて、日本の余暇表現は様々であるが、趣味にself-cultivationの側面が存在しているという観点を持ちながら、高齢者の生きがいを含めてHHに関連する概念を見返すことが生涯学習論を再考する上で大事であること、「第2部：友情・恋愛と学校教育の関係をどうするか」においては、医療・看護分野では健康のための社会関係資本形成が課題となるが、その前提として、理想とされる「純粋な関係」の意味や構築のされ方を探究していく基盤的な役割が教育文化研究に課されていることを明らかにした。受講者の視野を広げる斬新な講義内容であった。

第7回HHリレー講座「折り鶴プロジェクトで認知症高齢者と世界をつなぐ～ゆめ伴プロジェクト in 門真と‘Origami Pulse CIC’（英国）による取り組みと協働～」(3月27日)はDr. Lizzie Burns (Creative Specialist, University College London Hospital), 森安美氏 (ゆめ伴プロジェクト in 門真), コミサロフ喜美氏 (東京外国語大学非常勤講師), による、英国と日本をつないでのリレー講座が実現した。前半の「ゆめ伴プロジェクト in 門真」では門真市の高齢者施設で、認知症高齢者が折り鶴を折るということを通して、主体的に活動し他者との交流を楽しみ生きる喜びにつながっていることが紹介された。作成した折り鶴により海外との交流が生まれ、更なる成果へとつながっている。Dr. Burnsからは英国の病院や地域社会での‘Creative Specialist’としての取り組みについてまず動画でのご発表があり（日本語訳は事前に配信）、質疑応答はライブで行った。英国の各病院にはアートディレクターがおり、アートを介したケアが行われている。Dr. Burnsは主にオンコロジー病棟の大人の患者を対象にしており、その活動は患者のメンタルヘルスの向上にも役立っていることがデータにより示された。「ゆめ伴プロジェクト in 門真」との協働により、孤独感が増すコロナ禍での人びとの交流が実現し、英国の医療スタッフと日本の認知症高齢者の「相互回復」につながったという。人びとの健康にアートが積極的に関与していく英国の‘Arts in Health’の実際を知り、さらにDr. Burnsの患者中心の創造的な取組から大きな示唆を得ることができた。アートとヘルスケアのあり方について国境を越えての重要な提言となる講演であった。

Ⅲ. アンケート結果と今後の課題

上記の講座の実施後に毎回アンケートを行った。全7回のアンケート結果の総括は以下の通りである。全ての講座においてその内容が「大変有意義だった」との回答が半数以上、「まあまあ有意義だった」との回答を合わせると回答者の9割を超えており、本事業への満足度は高かった。また、同様に、取り上げたテーマに興味を持ったか、という質問に対して半数以上が「大いに興味を持った」と答えていた。特に、全7講座中、5講座はすべての回答者が「大いに興味を持った」もしくは「まあまあ持った」と回答していた。

参加者からは多様な意見が寄せられた。全般的な講座に対する感想としては、前述の感想の評価を裏付けるように、満足度が高かったという意見、またそれぞれの講座が新規性のあるテーマであり、簡潔にわかりやすく取組の意義が示されていたため、それぞれのテーマへの興味関心が深まったという意見が多かった。

特に具体的な意見としては次のようなものがあった。本講座では医療や看護だけでなく、人文学や教育学、芸術などの複数の領域を横断する学問を融合した取り組みが多く紹介されており、そのような取り組みに対して多くの参加者が興味関心を持っていた。それゆえ、さらなる学際的な連携に対する期待の声があがっていた。また、講座では実践の効果を測定し、数値的に示しているものもあったため、そのようなエビデンスを今後確立していくことの重要性に対する指摘もあった。

参加者は医療現場や教育現場に所属している人が多く、本講座が自身の実践を振り返る機会にもなったとのことであった。それぞれの現場における改善の機会につながったという意見もあり、特に音楽療法や折り紙といった取り組みにおいては、実施の簡便さに対して意義が大きいことが示されており、実際に取り組みたいという声が多かった。さらなる学びを深めるために、資料や書籍を参照したいという意見があがっていた。

多くの好意的な意見があった一方で、講座の内容によっては初学者では理解が追いつかない、提示されていた資料の要点が分かりにくかった、といった意見もあった。本講座は公開講座として多くの方に開かれた形で開催されており、参加者のレディネスに合わせて学習内容を選択し、わかりやすい適切な資料を提示することの必要性が明らかになった。特にこの点について、今後検討の余地がある。

講座の実施方法に関しては、対面やアーカイブによる配信、講師が使用していた資料・文献の共有など、多様な方法での実施や資料の共有を求める声もあった。講座が専門家以外にも開かれていることを肯定的にとらえている参加者もいたため、今回のように公開講座という形

式での継続的な開催が望ましいことがわかった。

以上のように、講座に参加した多様な参加者からは多くの好意的な評価、様々な意見が寄せられた。今後については、学際的な取り組みの継続およびエビデンスの確立が求められている。講座の受講がきっかけとなり、医療や教育現場での取り組みに意欲を示す人もいるなど、実践の場における影響も大きかった。本講座での取り組みは多くの参加者に新たな視点や発見をもたらし、多様な領域での交流の促進につながったと考えている。

Ⅳ. おわりに

以上の通り、本事業は大学教職員および病院職員からHHに関心を持つ多くの参加者を得て（総参加者数は計356名）、HHに関する幅広いテーマを設定し、各テーマに適した講師による学習会・講座・講演会をほぼ毎月のペースで実施することで、当初の目的であった1)「領域を超えて全体でHHについての基礎知識を共有し共通理解を図る」という目的を十分に達成することができたと言えよう。HH新規科目の開講に向けた聖路加版HHの構築に関して、教員（講師）、受講者（大学院生が多数）が互いに学び合いながら組織全体で取組めた点に本事業の大きな意義があったと考える。また、2)「新規科目

開講に向けた教材開発」に関しては、このたびは教材としての印刷物は作成しなかったが、本事業担当者全員が期間中に医学書院の『看護研究』HH特集号に論文を執筆した。これは、HHの教材となる書籍の礎となるもので、本事業での成果を今後書籍の形で公にしていく計画が既に進展している。この出版計画は本事業に拠るものであり、我が国の今後のHH推進において重要な点である。3)「聖路加独自のHHの取組の社会的周知」については、期待以上の成果を得ることができた。

リレー講座と公開講演会の計5回を一般公開とし大学HPやSNS等で広報したことで、様々な職種、領域からも多くの学外参加者があった。さらに、これまで直接HH研究に直接かかわりのなかった国内外の著名な研究者や実践家、アーティストにHHの取組に関心を持っていただき、領域横断的かつグローバルな協働の可能性を得たことは、今後につながるネットワークの生成とその波及効果という点からも非常に意義深いことである。

以上、本事業で獲得したチームワークを土台とし、「聖路加HH創設」に向けた本教育プロジェクトの成果を本学の教育に還元すべく、まずは看護学研究科にて2023年4月に開始したヘルスヒューマニティーズ新規3科目に活かしていきたい。